

私の「ホツマツタエ」

尾木 由起子

はじめに

ここでは「ホツマツタエ」の概要を述べ、その信ぴよう性を高めるための一助として、実際にその場に出向き確認したこと、そしてさらに、「ホツマツタエ」で解る二つのこと、「国譲り」と「二つの賀茂神社」について記したい。

参考図書

「はじめてのホツマツタエ」

(天の巻・地の巻・人の巻)

今村聰夫 (かざひの文庫)

「甦る古代日本の真実・全訳秀真伝 記紀対照」

千葉富三 (文芸社・絶版)

「真実のホツマツタエを求めて」いときょう

(ホツマ出版)

「読み比べ古事記とホツマツタエ」

小深田宗元 (かざひの文庫)

「ゼロから始めるホツマツタエ」NAV I 彦

(かざひの文庫)

「古事記」上

「日本書紀」一 (岩波書店)

「ホツマ・カタカムナ・竹内文書・先代旧事本紀」エイブリ・モロー (ヒカルランド)

ユーチューブ

瀬織津姫チャンネル (山水治夫)

私が古事記、日本書紀の元となつたと云われている

「ホツマツタエ」(今村聰夫著)を手に取つたのは昨年のことである。まだ日本に文字はなかつたと言われていた時代、オシテ文字と云われる神代文字で書かれた、

全四十綾(章)の大著である。しかも五七調の韻文で、リズムがよい。記、紀よりもずっと現実的で解りやすい。天皇家が一代一代どのように続いてきたかがよくわかる。なにより、神(人物)のキャラクターがよく表現されていておもしろい。今村氏の訳も素晴らしいと思う。(NAV I 彦著作より)



「ホツマツタエ」は神代文字で書かれているので偽書とされ、写本も江戸時代中期のものが最古なので江戸時代中期に創作されたものと言われている。

確かに、今に伝わる文化的な行事、桃の花の雛祭り、菖蒲を飾り粽で祝う五月五日、七夕の祭り、菊と栗の祝い等、これが縄文晩期の話なのかと疑問に思う。しかし、反面、その土地土地の古い伝承(おびただしくある神社やその祭神・地名・語源)との一致もある。江戸時代の創作にしては大がかり過ぎると思う。それに、「ホツマツタエ」には遺跡との関連がないといわれていたが、平成八年、出雲の加茂岩倉遺跡より、ミカラヌシ(銅鐸)が出土したのである。これは「ホツマ

「ツタエ」の内容と一致するものであった。（ホツマツタ

工御機の三十四 一 崇神天皇六十年一）

「ホツマツタエ」は、全四十章のうち二十八章までを、神武の重臣、第六代大物主クシミカタマが第四代地神ウガヤフキアワセズ亡きあと、幼いタケヒト（神武）らを心配し、世の指針となるようにと、自ら記して阿

波の社に収めておいたとある。（ホツマツタエ御機の正妃はクシミカタマの妹で、クシミカタマは神武に殉死している。（紀元前五八四年）その後、崇神天皇の時代に、見いだされたクシミカタマの子孫オオタタネコが大物主神（大三輪神）の斎主となり、天皇からの要請もあり、朝廷に復帰できた感謝と、この書が末長く国政の規範となるようと、全四十章に執筆してまとめ、三笠臣ココカシマの推薦文を添えて、景行天皇に献上したのである。（ホツマツタエ最終章・一二六年）

今の時代、私たちが読んでいる「ホツマツタエ」が世に出るきっかけを作ったのは松本善之助氏である。氏は昭和四十一年に神田の古書店で「ホツマツタエ」の写本の一部に出会い、その後、苦労しつつ、愛媛県宇和島や滋賀県高島市で「ホツマツタエ」全四十章の写本を発見したのである。

小笠原長弘本 宇和島市の小笠原家で発見 明治時
代写本

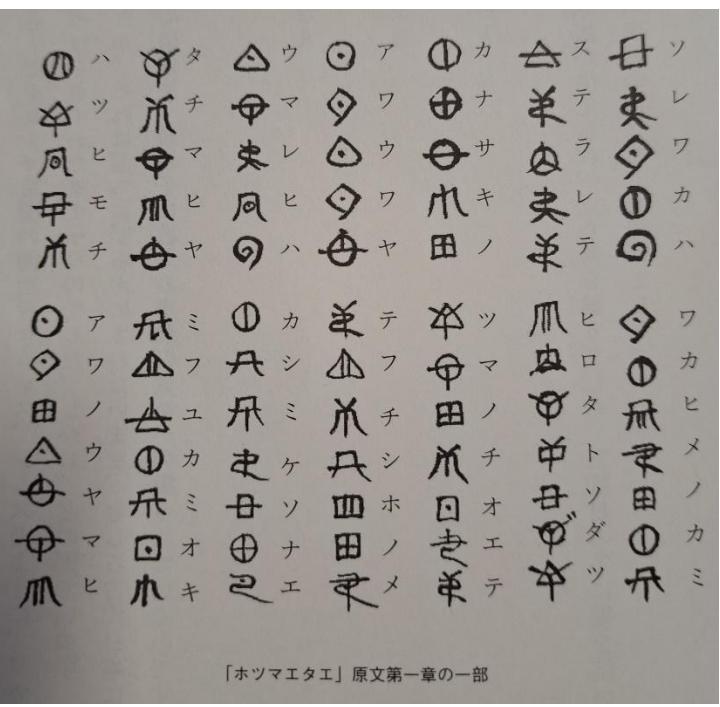
小笠原長武本 宇和島市の小笠原家で発見 明治時
代写本（国立公文書館 デジタルアーカイブで閲覧可）

現在、日本の文芸として親しまれている五七五七の短歌（和歌）は天照大御神の姉であるワカ姫（ヒルコ）によって大成された。ワカ姫は第七代天神イザナギ・イザナミ（フタカミ）の第一子として筑波で生まれた。

和仁古安聰本 高島市の日吉神社で発見 江戸時代
中期写本

和仁古安聰（三輪安聰・井保勇之進）は三輪氏の子孫で、先祖の赤坂彦は道鏡の強引な要求を拒否して自刃、その子世々彦は父の遺言に従つて「ホツマツタエ」を守るため、奥琵琶湖に隠れ住んだそうである。

エイブリ・モロー氏は「ホツマツタエ」が書かれた目的は記紀が記していない、神代の生活とはいなるものだったか、にあると云つてはいる。次は「ホツマツタエ」第一章の出だしである。



（エイブリ・モロー著作より）

しかし、両親ともに厄年であつたため、子に災厄が及ばないようにと、一旦、舟で流し、重臣のカナサキ（住吉神）に拾われ、カナサキ夫妻に愛情をもつて育てられたのである。「ホツマツタエ」の中でも、和歌は重要な役割を担つてている。その和歌について冒頭に記したのである。「ホツマツタエ」にはその他、乗馬のこと、医学（特に出産については熱心）、建築、教育、宇宙創成の話等々、当時の百科全書である。多くは高間殿といわれる宮中で天照大神や長老が諸臣の質問に答える形で述べられている。

さて、冒頭のワカ姫の話に戻ると、「ヒロタ」という語に気づく。果たして、ワカ姫が拾われた地には現在、廣田神社（兵庫県西宮市）が建つていて、主祭神は天照大神荒御魂（撞賢木巖之御魂天疎向津媛命）とある。（一線尾木）

実は「ホツマツタエ」が記紀と大きく違うところは、アマテラスが男性神として出ていることである。アマテラスは紀元前一二八五年（千葉富三氏著より）富士山麓の原の宮で生まれている。お妃が十二人いて、さらには正妃は瀬織津姫である。あまりに美しい人なのでアマテラス自らが向かえに行つたので、または、太陽としてのアマテラスに月として向かい合うことが出来る存在として、向つ姫とも呼ばれていた。「ホツマツタエ」の信ぴょう性を問うために、記紀には載っていない（ただし、大祓の詞には出てくる）正妃瀬織津姫の存在を確認するのが一つの方法であることは誰にでも気づく。瀬織津姫の父親が三島の豪族、サクラウチであることから、三島に、ゆかりの神社があるのではないかと思つた。果たして、いくつもあり、その一つ瀧川神社に行つてみた。



祓戸の神としてではあつたが、瀬織津姫の名が掲示してあるのを見ることができた。
ユーチューバーで、瀬織津姫親善大使を自称している山水治夫氏によれば瀬織津姫を祀る神社は全国に一二八社あるということである。
「ホツマツタエ」本文には次のようにある。

アマテラスは伊勢のイサワの宮から、五十鈴川のほとりの宮に移つてましたが、いよいよ最後の時を迎えて、瀬織津姫に遺言をしました。

またきさき ひろたにゆきて
わかひめと ともにゐこころ
まもるべし われはとよけと
をせおもる みせのみちなり
・・・・・

（ホツマツタエ御機の二八）

「とよけ」とはイサナミの父、第五代タカミムスビ、豊受の大神のことである。

かくして私もその地に行つてみた。この「瀬織津姫詣」は、この廣田神社と近くの西宮神社、そして聖地の六甲比命大善神社をセットで巡るのが常套のようであるが、今回は二カ所だけにした。



廣田神社



六甲比命大善神社

「六甲」は向つ姫の住む峰から採られた名前である。



うさぎ石

さて、この「ホツマツタエ」を読むことによつて、今までずっと疑問に思つてきつたことが、次々にそうだつたのか、と自分なりに理解できたのである。

例えば、なぜ「伊勢参り」があんなに人気があつたのか、なぜ記紀に有るからといえ、宮崎が天孫降臨の地として有名なのか、神武天皇はどこからどう来た人なのか、コノハナサクヤヒメの名の由来は、白山神社の祭神、菊理媛神とは、箱根神社について、等である。その中でも次の二つの事を取り上げてみたい。一つはいわゆる「国譲り」で、もう一つは京都の「上賀茂神社」・「下鴨神社」についてである。

廣田神社の摂社である六甲比命神社には、六甲道駅からバスで六甲ケーブル下駅へ、ケーブルを上つて山上駅で降り、さらにバスで行き、降りた所より森に分け入り、急な、人がどうにか通ることができるような道を下つたところに、何度も迷いやつと辿り着けた。今にも岩に押しつぶされそうな二畳敷くらいの小さな小屋である。近くに瀬織津姫の墓とされる磐座（うさぎ石）もあつた。やはり瀬織津姫は存在したのかと思った。

私は十数年前、近くのデパートの前で青森からきた、素朴でコミカルな二、三人で踊る民俗舞踊を見た。釣り竿と鯛を持った恵比寿さまなどに扮していて、いかにも出雲の踊りのようにみえた。青森と出雲は何か関係があるに違いないと、ずっと思っていたが、それが「ホツマツタエ」には出ていたのである。「国譲り」の話である。

紀元前千二百年頃、(今村著より)アマテラスは引退し、息子のオシホミミに政権を譲っていました。第七代タ

カミムスビ(高木神)が補佐し、ヤス川の宮で国政を取り行っていました。(のちに多賀大社の近くに移る)その宮の橘の木が突然枯れ、フトマニで占い、ヨコベ(偵察者)を派遣してみると、出雲で、もう一つ朝廷があるかのような事態が起こっていたのです。

・・・・

よこべかえりて もふさくは
いつもやゑがき おほなむち
みつれはかくる ことはりか
ぬかおたまかき うちみやと
これここゑに くらふなり

・・・ (御機の十・カシマ断ち釣り鯛のアヤ)

オオナムチはスサノオの子で、アマテラスから右大臣で軍事も担う大物主の地位を貰っていました。また、民人の生活向上のため、種袋を肩に担ぎ槌をもつて国内を回り、収穫向上に励み、備蓄米を倉に満たすなど、民衆に慕われてもいたのです。

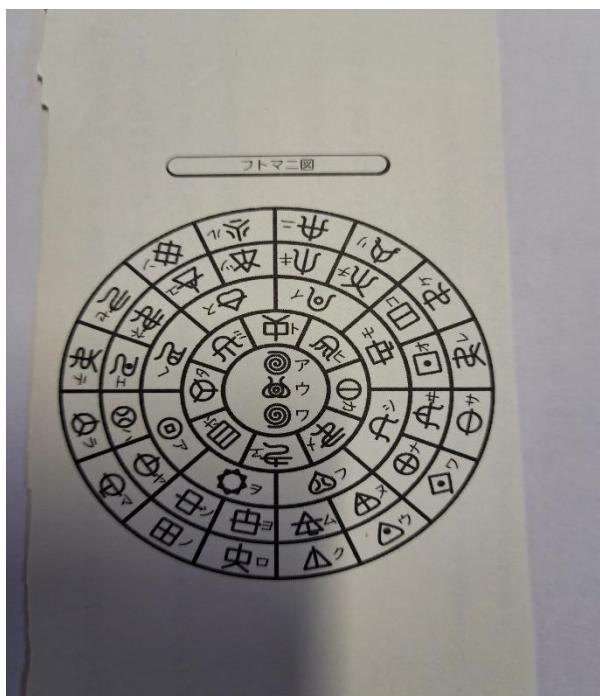
高木神はオオナムチの慢心を正すため、次々と使者を送りますが埒が明かず、ついに強硬手段をとり、軍を派遣することにしました。

このたひは たかみむすびの
とみかれお のぞくかどでの

かしまだち わにすきまつる
かみはかり ふつぬしよしと
みないえは たけみかつちが
すすみいて あにただひとり
ふつぬしが まさりてわれは
まさらんや たかきいさみの
みかつちや ふつぬしそえて
かしまだち

「かしまだち」とは、右の臣（右大臣・剣の臣）のシマ（職分）を断つということである。

ここで、「右」を何故「カ」と読むかに言及せねばならない。



(NAVI彦著作より)

この「ホツマツタエ」の時代は「ア・ウ・ワ」と読める中心の神(ミナカヌシ・アメミオヤ・クニトコタチ)の周りに四十八のオシテ文字が配置された占い図、「フトマニ」が重要視された。「ア・ウ・ワ」の周

配置されたのは国常立の神の八人の皇子、国狭槌尊（ト・ホ・カ・ミ・エ・ヒ・タ・メ）である。その時の統治者を真ん中とすれば、右に右大臣（剣の臣）、左に左大臣（鏡の臣）が並ぶ。この「フトマニ」では「ア・ウ・ワ」の右に「カ」の尊、左に「タ」の尊が配置されている。次は「ホツマツタエ」での使用例である。

アマテラスはこの国の政治の形態を「カの鳥」に例えて諸臣に説明しています。

かのとりの かたちはやたみ
くびはきみ かがみはたはね
つるぎかは もののへはあし

（御機の二十四）（一線尾木）

（かの鳥の 体は八民 首は君 鏡はタ羽 剣カ羽
物部は足・・・）

結局オオナムチの息子の一人、タケミナカタは抵抗し信濃の湖（諏訪湖）まで逃げましたが、長男クシヒコ（後世 恵比寿神）の諭しもあり、オオナムチは服従しました。

ときによつらふ おほなむち
ももやそかみお ひきゐきて
まめもひかげの なんたあり
たかみむすびの たたしゑた
ことわりあれは みことのり

たまふあそべの あかるみや
あふゆおうくる おほなむち
あかるあそべの うもとみや
つくるちひろの かけはしや
ももやそないの しらたてに
うつしくにたま おほなむち
つかるうもとの かみとなる

オオナムチは一族を率いて多賀の宮でまで来て恭順の意を表し、オシホミミから、あふゆ（天恩頼・ここでは寛大な処置）を受け領地替えとなり、アソベの地のアカル（天日隅）宮（岩木山神社）を賜ることになつたのです。その地でもオオナムチは持ち前の能力を発揮し、一族から「ウツシクニタマ」を移し国玉・頤国玉（ウ）神と称えられ、津軽大（ウ）本の神として祀られたのです。一方、カシマ断ちを成功させたタケミカズチはオシホミミより、カシマ神の称え名を賜ります。

これで、長年の私の疑問も解けたのである。しかし、鹿島神宮もあり、岩木山神社に頤国魂神も祀られているのに、記紀にこの話が載つてないのは何故であろうか。

次に二つのカモ神社を取り上げてみたい。上賀茂神社の正式名は賀茂別雷神社である。下鴨神社のそれは賀茂御祖神社である。京都ではこの二つの神社の例祭、葵祭開催の時に、今年は誰が斎王代に選ばれるのかと話題になると云う。神社多しといえど、斎王の制度があるのは、伊勢神宮と、この両カモ神社だけである。

さて、ここで「ホツマツタエ」に載っているニニキネの話をしたい。

ニニキネ（瓊瓈杵尊・オシホミミの次男）は、両神（イザナギ・イザナミ）が民の生活向上を目指し全国を巡ったように、この日本列島は稻作に適していると気づき、自分も全国を巡り、灌漑土木工事を行いたいと、アマテラスに許可を求める。自分のニハリの宮の近辺の川に堤を築き、山水を溜め、必要な時に流す方法で安定した収穫が得られるようになつたからです。ア

マテラス居住の地、伊勢宇治山田あたりでも高台に田
No.7

を拓き、見事な田としアマテラスから認められたので
す。アマテラスはオシホミミの長男ホノアカリが飛鳥
親王としてナカ州（葦原州）を統治しているのを承知
の上でニニキネにも、アマノコヤネとコモリを両翼の

大臣として三種の神宝を授け、ハラ親王の称号を与え
たのです。その後ニニキネはハラミ山（富士山）の裾
野を田に変えるべく八方を掘らせ八つの湖を作りま
した。ニニキネを慕つているニハリの民が協力しまし
た。（やまなか、かわくち、もとす、の名が出てくるの
にはびつくり）さらにオキツボの峰に立ち、ここから

見える山背（京都盆地）を掘り、（深泥池・蟻ヶ池）

この峰を富士山のように見立てて農地開拓をすすめ
たのです。貯水池ができたことで水量を支配する事が
できました。この事業は百年も掛かるかと思われまし
たが、六十年（鈴歴の一枝）で成し遂げられたので、
この峰を一枝（比叡）と呼ぶようになったのです。そ
して、雨を降らせ、稻光をおこす雷（鳴る神）をカグ
ツチ（火神）とミツハノメ（水神）に分けて祀りまし
た。

ここに至つて、アマテラスはニニキネを「雨が降り、
日が照るのは全て天上の神の恵みによるものだが、新
たな二神を生み出し、恵みを漏れなく受け取る術を得
た、この功績は、国常立の功績に更なる稜威（威光）

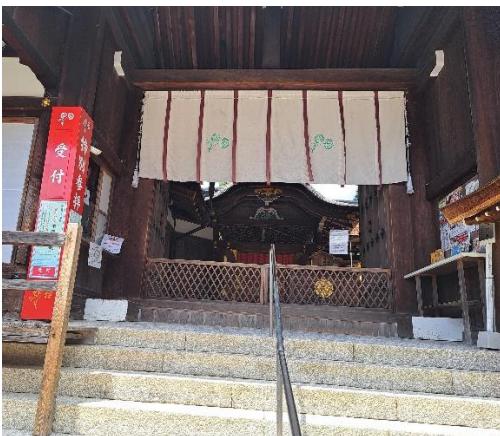
を加えた偉大な成果である」と、最大級に褒め、「別
わけ

雷（いかづち）の天君」という称号を与えたのです。

・・・

みことのり あめはふりでり

まつたきは いかつちわけて
かみおうむ これとこたちの
さらのゐづ わけいかつちの
あまきみと をしてたまわる
・・・
(御機の二十四)



賀茂別雷神社



賀茂御祖神社・糺すの森

さて、次にニニキネの三男ウツキネ（ヒコホオデミ・山幸彦）の話をしたい。

ウツキネは琵琶湖で釣りを楽しんでいた兄、サクラギ（海幸彦）の釣り針をなくし、途方にくれているとシオツツの翁が現れて、ウツキネを舟に乗せ、筑紫の日南海岸に到着させました。そこでソオ（曾於）のハデカミの助けを得て無くした釣り針を見つけることができたのです。一刻も早く兄に返したいと、使者としてシガ（船魂神の一人・帆を発明する）を送りました。瑞穂の宮（白髭神社・高島市鵜川）にいたサクラギはシガに対して失礼な態度をとり、怒ったシガはサクラギを懲らしめ、ウツキネの臣下にしたのです。ウツキネは筑紫に留まり、ハデカミの娘、トヨタマ姫を正妃とし、以前、父ニニキネが筑紫の地で井堰を築いた各地を巡り新たに田を拓きました。シガ（福岡県東区）の地では油粕を田に入れ（粕谷）肥し、アソ地方では、オオナムチの成功例を参考に鰯を入れ土地を改良し、「火の邦」と呼ばれていたこの地を「肥え邦」と云われるまでにしたのです。そうしているうちに、父ニニキネからウツキネは日嗣を受け継ぐことになり、急きよ淡海の瑞穂の宮に戻らなければならなくなりました。トヨタマ姫は身ごもつていたので、後から安全な鴨舟で行くことになりましたが、思いの他早く北の津（福井県敦賀・氣比神宮）に到着し、松原に建てられた茅葺の産屋が出来上がらないうちに、男児を出産したのです。鏡の臣、アマノコヤネがカモヒトと名づけました。この皇子がナギサタケウガヤフキアワセズです。ところが、父ウツキネはカツテ（勝手神・助産の達人）に止められていたにもかかわらず、うつかり産屋を覗いてしまいます。トヨタマ姫は鰐（記）にも竜（紀）にもなつていたわけではなく、ただ「はらばひに よそひなけれは」というだけなのですが、恥じて、姫は弟、タケスミ（建祇）を連れて、最終的に貴船神社にこもってしまうのです。

・・・・・ きみまつはらに
すすみきて うみやのぞけは
はらばひに よそひなけれは
とぼそひく おとにねざめて
はつかしや おとたけすみと
みなつきの みそぎしてのち
うぶやでて をにふにいたり

みこいだき みめみてなでて
はははいま はぢかえるなり
・・・・・

（御機の二十六・ウガヤ葵桂のアヤ）
ウツキネは八方手を尽くして説得するのですが、姫は承諾しません。そうしているうちに、皇位をウツキネに譲り、自らは太上天皇となつていたニニキネが葵と桂の枝を持つてミヅハメの社（貴船神社）を訪れたのです。

・・・・・ おおゑすべらぎ
わけつちの あおいかつらを
そでにかけ みやにいたれば
ひめむかふ ときにはおもち
これいかん とよたまこたえ
あおいはぞ またこれいかん
かつらばぞ いつれかくるや
まだかけず なんぢよおすて
みちかくや ひめはおそれて
かかねども なぎさにおよぐ
あざけりに はらばいのはぢ
かさぬみは あにのほらんや
これはぢに にてはぢならず
しかときけ ・・・・・

（御機の二十六）

葵も桂も必ず茎から左右対称に一对の葉ができる植物であるという。夫婦は常に一緒に居ねばならない、いうたとえであろう。

姫はこうして、さらにウツキネとの歌の贈答の末、ようやく宮中に上るのです。太上君（ニニキネ）は弟、タケスミにはカワアイの邦（京都市左京区・河合神社）を賜りました。そして、ウツキネは、姫を守つたことを感謝して、妃の一人、イソヨリ姫をめ合わせたのです。ウツキネとトヨタマ姫は仲睦まじく、長きにわたつて世を治めましたが、日嗣を皇子のウガヤフキアワセズに譲りました。アマノコヤネが鏡の臣で、コモリが剣の臣です。ウツキネと姫が神上りすると、遺言通り、

ウツキネ（山幸彦）は氣比神宮（福井県敦賀市）、トヨタマ姫は貴船神社に祀られました

さて、次にウガヤフキアワセズの話に移らせていただく。

ウガヤフキアワセズは、昔イザナギ・イザナミ（両神）が住んでいた多賀の宮（多賀大社・滋賀県犬上郡多賀町）を、老朽化が進んでいるので作り替え、ここを本拠地として両神を拝んで政（まつりごと）を行つていこうと、瑞穂の宮から移りました。このことを知つた、アマテラスは褒めて、戸隠神（タチカラオ）を使いとして御言宣（みことのり）をしたのです。歴代皇統の神が書き記し

続けてきた聖典「カグの書」（「御祖百編」）と共に、天の両神ならぬ、地の両神であるとして

「御祖天君」の称号を与えました。

・・・・・ みくらひなりて
いせにつぐ あまてるかみの
みことのり とかくしおして
わがみまご たがのふるみや
つくりかえ みやこうつせば
あにつぎて わのふたかみぞ
われむかし あめのみちゑる
かぐのふみ みおやをあみお
さづくなも みおやあまきみ
・・・・・

（御機の二十七 御祖神船魂のアヤ）

そして、ウガヤの君は常に糺の殿にいて天下を治めていましたが（コモリが毎日そこを流れる小川でみそぎをして身を正していたので、糺すという名がついた）、世継ぎに恵まれないでいました。そこで「フトマニ」を用いようやく若いヤセ（八瀬）姫に子どもができたのです。イツセ（五瀬）です。けれどもヤセ姫は出産を終えると直ぐ亡くなってしまったのです。乳母が必要となり、

比叡山の麓に良い母乳が出ると評判の女性がいましたが、要請に応ぜず、詔（みことのり）を出しそうやく出仕することになったのです。この人が、タマヨリ姫です。タマヨリ姫はタケツミ（タケズミ）とイソヨリ姫の娘で、両親は亡くなつていましたが（河合の神）、一人で別雷の神に熱心に詣でる日を過ごしていたのです。父はなく、神靈によつて生まれたという、ミケイリ（ウガヤが命名）を連れていました。玉のように美しい人でした。その後、タマヨリ姫は内局としてイナキイ、さらに正妃に昇格するとタケヒトを産んだのです。この子がカンヤマトイワレヒコ（神武天皇）です。

さて、時代は下り、コモリの長男カンダチ（代四代大物主）は筑紫に赴任していましたが、亡くなると、後を息子のフキネに継がせました。フキネはニニキネやウツキネを繼承して熱心に農耕技術を指導し、農業人口を伸ばしました。けれど、フキネには子がいなかつた為、叔父のツミハの長男クシミカタマ（櫛甕玉・「ホツマツタエ」著者の一人）を乞い願つて養子にもらい受けました。ツミハは阿波を本拠地として、ウガヤの君の配慮のもと、各地にある政務所（ハラの宮・飛鳥の宮）を行き来し、多方面において活躍し「八重事代主」の称号をもらっていたのです。クシミカタマはフキネが神上がりすると、筑紫勅使に任命されたのですが、母の強い要望で大和に戻ることになつたのです。これによつて、クシミカタマは自分の代わりにウガヤフキアワセズに筑紫への御幸を願い出たのです。ウガヤの君はイツセを自分の代理として多賀親王として宮に置き、オシクモ（アマノコヤネの子）とクシミカタマを左右の臣としました。そして、タネコ（オシクモの子）をタケヒトの大御守（おおんもり）に据えて、室津港（兵庫県たつの市）からウドの浜に上陸、カコシマの宮に入られたのです。この時皇子タケヒトは五才でした。ウガヤフキアワセズは筑紫三十二縣の守の要請に応じて各地を回り、荒廃した灌漑施設を補修して機能を回復するのに尽力したのです。ミヤサキの宮に落ち着かれるとなつて、自分の臨終を悟り、

タケヒトとタネコを呼び寄せました。ウガヤの君が亡くなると筑紫三十二縣の守達はタケヒトに筑紫親王の称号を奉げたのです。ウガヤの君は各地にいろいろな名で祀られました。

・・・・・
このよしお たがにつくれば
もにりて ひうがのかみと
まつりなす おにふにまつる
かものかみ あひらつやまは
みおやかみ のちにたまより
かみとなる かあひにあわせ
みをやかみ めをのかみとて
いちしるきかな

(御機の二十七)

、(この由を 多賀に告ぐれば 喪に入りて 日
向の神と 祀なす 遠敷に祀る 賀茂の神 吾
平津山は 御祖神 後に玉依 神となる 河合
に合わせ 御祖神 夫婦の神とて 著しるきか
な)

多賀大社の摂社に日向神社がある。おにふ(遠敷)のある福井県には賀茂神社があり、祭神の一人に鶴草葺不合命とある。臨終の地、吾平津神社(宮崎県日南市)は現在、神武の日向での妃、アヒラツ姫を祀る、とある。ともあれ、ここまで「ホツツマツタエ」を読んでくれば、上賀茂神社の「別

雷」、下鴨神社の「御祖」とは誰を指すかは自明である。しかるに、現在は上賀茂神社の祭神「別雷」については、「山城国風土記」より、タマヨリ姫が雷神と交わって生んだ子としている。下鴨神社の祭神は玉依媛命と、その父、八咫烏となつて神武天皇を先導した、賀茂建角身(カモタケツヌミ)命としている。しかし、天皇家が、よくわからない雷の子や、鳥の化身などに、未婚のわが娘を斎王として奉仕にだすだろうか。兩カモ神社の神紋の双葉葵はどう関係するのだろうか。地神

四代の内、初代の天照大神(伊勢神宮)、二代の

瓊瓈杵尊(ニニキネ・別雷の神)、四代、鶴草葺不合命(ウガヤフキアワセズ・御祖神)であればこそ、斎王の制度も納得がいくのである。そして、葵葉を持ってトヨタマ姫を説得したニニキネであればこそ、「双葉葵」はわかるのであるし、トヨタマ姫の子であるウガヤフキアワセズであるから双葉葵なのである。さらに、めをの神(夫婦の神)としてタマヨリ姫と一緒に祀られているのであるから、よくわかる。



最後に両カモ神社に冠してある、「カモ」について付け加えたい。

下鴨神社の説明係の方によれば、鴨川の上流と下流の傍らにあるから賀茂と付いているのだと云う。そんな単純なことではないと思い、悩んでいたが、「ホツマツタエ」の後半に説明がでていたのである。景行天皇の筑紫巡行中のところで、コユ縣(宮崎県児湯郡)でニニキネを惱んでいる箇所である。

(ニニギの命は)

高千穂の 峰に登りて
 日の山の 朝日にいなみ
 妻向い 上下恵む
 神となる 国の名もこれ
 力は上を あまねく照らす
 モは下の 青人草を
 恵まんと 鳴る神の雨
 良き程に 別けて御ぞろの
 潤いに 民賑わせる
 功は 加茂別雷の
 神心 ······

(御機の三十八)

(千葉氏訳 一線尾木)

つまり、「力」は天上から、「モ」は地上の民に
 恵みを、ということで、国全体を良い方向に統治
 する、という意味なのである。だから、ニニキネ
 もウツキネもウガヤフキアワセズも賀茂の神な
 のである。トヨタマ姫のウツキネへの返歌に次の
 ようにある。

No.
11.

「沖つ鳥 力モを治むる君ならで よのコトゴ

トを エヤはふせがん」

(御機の二十六 今村氏訳)

系図（名称は「ホツマツタエ」による）

○番号は統治順番

「わたしのホツマツタエ」参考

